

## 遊休鶏舎を活用した肉用鶏農場への飼養衛生管理指導

紀南家畜保健衛生所  
○山本敦司 瀧藤眞一  
谷口俊仁

### 【背景および目的】

畜産経営の安定と畜産物の安定供給を図るためには、家畜の伝染性疾病の発生を予防するとともに、万一発生した場合には、そのまん延を防止することが極めて重要である。

その中でも、家畜の所有者が最低限守るべき衛生管理の方法が「飼養衛生管理基準」である。

平成29年4月、県内肉用鶏養鶏組合から、平成29年12月より遊休肉用鶏農場を活用し肉用鶏の飼養を開始するにあたり衛生指導の依頼があった。そこで飼養衛生管理面、特に破損等が多くみられた鶏舎の修理等について指導を実施した。

### 【遊休鶏舎概要】（図1）

鶏舎は16棟あり、山林に囲まれ川沿いに立地している。平成25年に前経営業者が廃業して以来、放置状態で、鶏舎周囲は雑草や樹木が生い茂っていた。

鶏舎については床面は再活用に比較的耐えられる状態と思われたが、側面の金網・カーテン・防鳥ネットは劣化が著しく、再活用するには全面的に修理する必要があった。

### 【導入前（H29.4～H29.12）の課題と対策】

全16鶏舎について野生鳥獣侵入防止対策状況を5段階（5：充分できている、4：概ねできている、3：一部しかできていない、2：ほとんどできていない、1：全くできていない）で評価し修理が必要な箇所を洗い出した。

しかし、修理の本格始動が入雛の半月前からであったため、優先順位の高いものから順に対策を行うよう指導した。

#### ・「鶏舎側面の金網」（図2）

全16鶏舎で金網破損があり評価1だった。破損箇所に金網、カーテンや防鳥ネットを利用した対策を指示し、現在、金網の二重張りやカーテン利用により全16鶏舎とも評価4になった。今後、防鳥ネットや寒冷紗等を利用し鶏舎周囲を囲む予定である。

#### ・「鶏舎出入口扉」（図3）

9鶏舎で出入口扉の破損（扉の全損や一部破損）があり評価1だった。近隣の遊休肉用鶏農場（組合管理）より資材確保、交換修理

できたので、現在、評価 5 になった。

・「鶏舎周囲の樹木繁茂状況」（図 4）

4 鶏舎で樹木が鶏舎屋根に伸びた箇所があり評価 1 だった。野生鳥獣侵入の可能性や鶏舎屋根破損する可能性があったため、鶏舎周囲の樹木の枝を伐採し、現在、評価 5 になった。

・「農場出入口の車両消毒」（図 5）

当初、車両消毒設備が全くなかったため評価 1 でした。そこで速やかに農場出入口に車両一時停止区域を設定、手押ポンプを設置し、また、農場出入口付近の 2 箇所（手前とやや奥）と 1, 2 号鶏舎への通路出入口付近の 1 箇所に通路全面に厚めに石灰（粒状）を散布し石灰帯を敷設し、評価 4。その後、さらに農場出入口付近に手押しポンプに代わり動力噴霧器を設置し評価 5 になった。3 箇所の石灰帯については継続して散布している。

その中、1 回目の入雛で問題があった。入雛直前にもかかわらずガスや電気設備が全体の半分の鶏舎の 1～9 号鶏舎までにしか整っていなかったため、事前の鶏舎内保温が確保できていない事例や、自動給餌レーン不具合による給餌不良、ガスブリーダーの不足等周辺設備の不備が多数認められた。このことにより死亡羽数の増加が充分予想されたため、従業員には異常があれば速やかに通報するよう事前に指導した。今回は入雛までに残り半分の鶏舎での各設備が間に合ったため事故はなかったものの準備不足で綱渡り状態だった。

また、1 回目の飼養管理が落ち着いた頃、従業員（4 名）に対し農場の現状をどのように意識しているかについて確認するため意識調査を行った。

- ・鶏を衛生的に飼いたい 【は い】 4 名
- ・そのために勉強したい 【は い】 4 名
- その場合、家保に講師をお願いしたい 【は い】 4 名
- ・鳥インフルエンザを知っている 【は い】 4 名
- ・鶏舎の現状についてどう思いますか 【良くない】 4 名
- ・鶏舎を改善していきたい 【は い】 4 名
- ・飼養衛生管理基準を聞いたことがある 【は い】 4 名

との回答があり、また、これまでの立入時の様子から従業員は非常に積極的で高い意欲、意識を充分にもっており、特に農場長は他の 3 名の従業員を牽引し、常に現状より良くしようと取り組んでいた。

【導入後（H29.12～）の課題と対策】

出荷成績は 1 回目（H29.12 入）：88,700 羽入雛、育成率 97.5 %。2 回目（H30.3 入）：76,500 羽入雛、育成率 96.8 %。3 回目（H30.6 入）：65,500 羽入雛、育成率 93.1 %と比較的良好な成績だった。（3 回目は

熱死による死亡羽数の増加があったためやや低率だった。)

その中で、毎回低育成率（92.9%）の鶏舎（5, 6号鶏舎）があったので、鶏舎内温湿度およびアンモニア濃度の測定を実施した。（対照鶏舎として1号鶏舎を設定。）1号鶏舎に対し5, 6号鶏舎は湿度やアンモニア濃度が高く推移していることから、当該鶏舎は空気が対流しにくいと考えられるので、ストレス軽減のためには十分な換気と舎内温度が下がりすぎないようにこまめな調節<sup>1)</sup>が重要と指導した（図6）。

また、暑熱による死亡羽数の増加が2回発生し、立入した事例があった。いずれも老朽化した換気扇の能力が低下したことによる換気不良が主原因と考えられ、十分な換気量確保のため扇風機増設を指示した（図7）。

この3回目の導入で初めて糞便よりコクシジウムが検出されたため、今まで取り入れてなかったオルソ剤による消毒を消毒プログラムに組み込み、以前から設置していた各鶏舎への石灰消毒槽に加え、オルソ剤による踏込消毒槽設置を指示した。

さらに、通報時間が1回目が17:00、2回目が15:00であったため、通報遅延の理由を聴き取りしたところ「死亡羽数が多いが、死因がほぼ熱死と思ったので通報するのを逡巡した」とのことだった。そこで鳥インフルエンザ発生時の通報遅滞が手当金等を減額される可能性があることについて実例を挙げて説明し、速やかな通報を改めて指導した。

その他の問題点として従業員不足が挙げられる。平成29年12月には4名いたが、組合内の人事異動や退職により、平成30年7月に2名となった。一人あたりの飼養羽数を計算してみると、系列A農場は飼養羽数120,000羽を5名（24,000羽/人）、系列B農場は飼養羽数90,000羽を4名（22,500羽/人）で、当該農場は飼養羽数85,000羽を当初4名（21,250羽/人）、現在2名（42,500羽/人）となり、同系列農場と比較しても不足している状況だった。組合事務所に問い合わせたところ、現在補充従業員を募集しているとのことだったが、衛生管理の不備や従業員の意欲低下につながるため、早急な対応が必要であると考えた。

#### 【課題および今後の指導】

伝染病まん延防止のためにも、飼養衛生管理基準に準拠した修理ができてから飼養すべきであり、今回は修理開始時期の遅れが最大の問題点と考える。

そこで今後このような遊休鶏舎活用の事例があった場合の対応策として、できるだけ早く家保と相談のうえ、十分に余裕のある修理計画を立て、家保の最終確認後に飼養開始するよう指導する必要がある。

ある。

また、農場の衛生状態維持及び向上のため、従業員確保についても引き続き指導が必要である。

さらに、夏場に向けて新たに腐食した金網の修理や、少人数で実施可能な鶏舎消毒方法の検討、コクシジウム対策等衛生対策を継続指導し、農場の経営安定につなげていきたい。

#### 【参考文献】

- 1) 森川敦夫 (株)日本チャンキー) : 換気の考え方 : 第 91 回 JCA 技術ゼミナール : 2010